

感動新聞

平成23年8月号 発行者 細川栄一

皆様、元気ですか？ 成功する秘訣はAAS（明るく、愛嬌、素直に）だそうです。意識してやりましょう。ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

日本人がつくった自然の森...明治神宮

東京の街を高い場所から見下ろすと、濃い緑に覆われた広大な一角が目に入る...神宮の森だ。かつて、ここは樹木のほとんどない荒地だった。当時、明治神宮の森づくりに関わった人々は、どんな思いで、都会の真ん中に、100年後も続く自然の森をつくろうとしたのか。そこに、現代の私たちが森との関わりを考える鍵を見つけられるかもしれない。

明治神宮の森づくりには「明確なビジョン」があった。大正9年。明治神宮創建にあたり代々木の地に「神の森」を作ろうと、日本全国から10万本以上の「献木」が集められた。造営に従事した勤労奉仕者の数は延べ11万人。

創立当初明治神宮に何を植えたら立派に育つか、又100年後自然の状態になっていくのか、当時の学者たちが考えました。そして椎・樺などの照葉樹を植える事に決定したのです。理由は、大正時代、すでに東京では公害が進んでいて、都内の大木・老木が枯れていったのでした。そこで100年先を見越して神宮には照葉樹でなければ育たないと結論づけたのでした。

4つの段階を経て森は完成する

第1段階は、まず見た目として神社にふさわしい森を形づくるため「仮説の森」を作る工程。在来樹木である赤松や黒松、あるいは全国から届けられた10万本の中から大きなものを選んで植える。松の間には成長の早い檜やサワラ、杉、樅などの針葉樹を植え、さらにその下に将来の主木となる樺や椎、楠木などの常用広葉樹を植える。

第2段階では、林冠の最上部を占めていた赤松や黒松が、下から伸びてきた針葉樹に圧倒されて次第に枯れていく。数十年後には、台頭してきた檜やサワラなどの針葉樹が最上部を支配するようになる。在来種の松は数カ所に点在するようになる。

続く第3段階では、とうとう樺や椎、楠木などの広葉樹が林相の中心を占め始める。その間に、檜、サワラ、杉などが混生し、まれに赤松や黒松、樺などが見られるといった状態になる。

最後に4段階では、樺や椎、楠木などが主木としてさらに成長するとともに、2世代目の木が育ち、常緑広葉樹林が広がっていく。こうして主木が人手を介さず、自ら世代交代を繰り返す「天然林相」に到達した時、森は完成する。

荘厳な鎮守の森という様相を早期に実現し、風土に合った自然の森を100年以上もの時をかけて完成させていくという、見事なランドデザインだ。

この構想を、実に90年も前の日本の学者たちが描いてきたのである。

大正初期の日本人が、当時の英知を結集してつくりあげようとした「永遠の森」

そこにあるのは、森づくりへの明確なビジョンと、100年先を見据えた壮大なランドデザイン。

参照下記HP

<http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/article/20110722/278551/index.shtml>

大正9年(1920年)から91年が経ちます。100年後が近づいてきています。

日本人の叡智を感じます。

森は「社」とも書きます。

神社の森「鎮守の社」は永遠に続くものでなければならぬのです。

それは自然に近い状態をつくりあげることなのかもしれません。